



Japan Association of College English Teachers

JACET

The 11th English Education Seminar

SEMINAR THEME

English Education Aimed by the New Course of Study Guidelines:
What Can Universities Do?

Sat. 23 March 2024

10:00-17:00

17:30 - 🍷

Venue: Bunkyo University, Koshigaya Campus,
3337 Minami-Ogishima, Koshigaya-shi, Saitama
343-8511, Japan

In-person Seminar

Contents

Greetings from President	1
Seminar Theme	2
Seminar Program Committee	3
English Education Seminar Programme	4
Invited Speakers	5
Poster Session	7
Sponsor Members' Exhibitions	14
Access to the Venue	15
Notes	18



JACET 第 11 回英語教育セミナーの開催にあたって

一般社団法人大学英語教育学会

会長 小田眞幸

JACET 第 11 回英語教育セミナーを開催致します。JACET は毎年 8 月に国際大会とサマーセミナー、12 月に JAAL in JACET 学術交流集会、そして年度末の 3 月に英語教育セミナーを実施していましたが、ここ数年、新型コロナウイルスの感染拡大のため、実施の見合わせ、オンラインでの開催、そして規模を縮小しながらも対面とオンラインのハイブリッド形式での開催と、様々な制約の中で会員がアイデアを出し合い、工夫をしながら学会活動を維持してきました。そして今年度(2023 年度)はこれまでに国際大会、サマーセミナー、JAAL in JACET 学術交流集会を再び対面形式で開催することが出来ました。本セミナーは言わば 2023 年度の最後を飾るイベントであると言ってよいでしょう。

本年度のテーマは「新学習指導要領が目指す英語教育：大学では何ができるか」です。昨年度の第 10 回英語教育セミナーのテーマ「新学習指導要領後のもとの英語教育：小・中・高・大の連携」に引き続き、特に高等学校の英語教育が新学習指導要領によってどう変化し、そこで学んだ生徒を近い将来迎える大学の英語教員はどう対応すべきなのかという点について活発な意見交換ができればと思っております。卯城祐司先生（筑波大学）による「学生 1 人 1 人の個性的な英語力の可視化を目指して」、および津久井貴之先生（群馬大学）による「高校英語授業のアップデート：直面する課題と授業改善の見通し」基調講演をはじめ、ポスター発表など盛りだくさんなプログラムが用意されています。さらに以下の賛助会員の皆さんによる展示も行われます。

ETS Japan 様

クリエイド・ラーニング株式会社様

ケンブリッジ大学出版株式会社様

ピアソン・ジャパン株式会社様

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会様

株式会社 EdulinX 様

株式会社 mpi 松香フォニックス様

株式会社 エル・インターフェース様

株式会社 朝日出版社様

公益財団法人 日本英語検定協会様

これらのプログラムを通じて、発表者、参加者の間の新たなネットワークづくりのお手伝いができることを確信しております。

最後に、昨年引き続き会場を提供していただいた、文教大学には心からお礼を申し上げます。またいろいろと期末試験、入試等でご多忙な時期に準備を進めて下さった JACET 第 1 号事業委員会（セミナー担当）の皆様には感謝を述べ、ご挨拶とさせていただきます。

JACET 第 11 回英語教育セミナー案内

テーマ：「新学習指導要領が目指す英語教育：大学では何ができるか」

小学校から高等学校まで新学習指導要領が全て施行されてから本年度で 2 年目を迎える。平成 29 年度に文部科学省は予測不可能な時代に一人一人が未来の創り手となるべく、「生きる力」の育成を目指し社会に開かれた教育課程の実現を打ち立てた。令和を迎えてから、新型コロナウイルスの拡大、その結果もたらされた急速な IT 化、多様化する社会の中で「生きる力」の育成の必要性が以前にも増して重要となってきた。

2023 年 3 月 20 日・21 日に開催された第 4 回ジョイントセミナー（第 49 回サマーセミナー、第 10 回英語教育セミナー）では「新学習指導要領後のもとの英語教育：小・中・高・大の連携」のテーマのもと、異校種間連携を試みたシンポジウム、発表を通して小・中・高・大の繋がりについて考える機会を提供した。2024 年 3 月に開催予定の第 11 回英語教育セミナーのテーマは「新学習指導要領が目指す英語教育：大学では何ができるか」という観点から大学における英語教育について考える。学習指導要領がどのように変わったのか、特に高等学校の英語教育がどのように変わったのか（または変わっていないのか）、近い将来大学に入学する高校生は英語の授業で何を学んできているのか、入学者の英語力について等、大学教員が学生指導にあたり理解する必要があるだろう。その理解をもとに、大学ができることを考え、また大学入試の見直しも必要になってくる。本セミナーでは講師の先生方から高校の新学習指導要領、英語の検定教科書等について学ぶ機会を提供する。



JACET the11th English Education Seminar

First Division (International Convention & Seminars) Committee

Directors Takehiro Sato Norifumi Ueda Atsuko Watanabe Toshiyuki Kanamaru
Masanori Oya

First Division Committee (Seminars)

Chair Hiromi Murakami
Vice-Chair Wakako Kobayashi

Yutaka Fujieda	Yukiharu Nakazumi	Tazu Togo
Hirofumi Hosokawa	Tadahiko Nambu	Masaichi Uchida
Mitsuko Imai	Takahiro Noborimichi	Masahiro Yoshimura
Akiko Kochiyama	Tomohiko Oda	
Hitoshi Muranoi	Etsuko Sasai	

Registration period: Fri. 1 December, 2023 to Sat. 16 March, 2024

Participation fees:

JACET Members	5,000 yen	(JASELE members included)
Students	1,000 yen	(JACET members & non-members)
Non-members	7,000 yen	

Registration procedure:

JACET the 11th English Education Seminar

<https://www.jacet.org/ees-registration/registration/>

Please register from the website above.

Registration deadline: Sat. 16 March, 2024

Contact:

The Japan Association of College English Teachers

一般社団法人 大学英語教育学会事務局

TEL: 03-3268-9686 (13:00-16:00 Weekdays)

E-mail: jacet@zb3.so-net.ne.jp (JACET 事務局)

E-mail: seminar@jacet.org (英語教育セミナー委員会)

The 11th English Education Seminar Programme

会場：文教大学越谷キャンパス 14号館1階 14101

Time	Events
10:00-	Opening ceremony (開会挨拶) 小田真幸会長
10:15-11:15	Lecture 1 「高校英語授業のアップデート：直面する課題と授業改善の見通し」 津久井貴之氏 (群馬大学)
11:15-11:45	Discussion time among participants 1
11:45-12:15	Sponsor members' presentations (賛助会員によるプレゼンテーション)
12:15-13:30	Lunch break (昼休憩)
13:30-14:00	Sponsor members' exhibitions (賛助会員による展示)
14:00-14:30	Poster session (ポスターセッション)
14:30-14:45	Break
14:45-15:45	Lecture 2 「学生1人1人の個性的な英語力の可視化を目指して」 卯城祐司氏 (筑波大学)
15:45-16:15	Discussion time among participants 2
16:15-16:30	Wrap-up (全体のまとめ)
16:30-17:00	Closing ceremony (閉会式)
17:30-19:30	Party at the Canteen, 2nd floor (懇親会：学生食堂2階)



懇親会申込：締切は2024年3月14日(木)です。次のリンクから申込みできます。

<https://forms.gle/NQkjmspTGmS96b89>

(会費 3,000 円)

Lecture 1

「高校英語授業のアップデート：直面する課題と授業改善の見通し」

津久井貴之氏（群馬大学）

講演①【要旨】

大幅に改訂された今回の学習指導要領に基づき、小・中学校ではさまざまな実践が蓄積され、新たに生じた指導上の課題を改善するサイクルに入りつつあると感じている。一方、高等学校は、2023 年度高3 生が卒業を迎え、「新課程」で3 学年がそろそろ 2024 年度に、ようやく学習指導要領改訂に基づく本格的な授業改善のスタートラインに立つところだろう。小・中学校とは異なり、高等学校では学習指導要領が年次進行で実施される。実際、「旧課程」、「新課程」と呼ばれる2つの教育課程が存在した中で、年次進行の歩みのスピードを超えて全学年で授業改善が進められてきたケースは少ない。

このような現状認識に立ち、講演では、以下の3 点に焦点を当て、指導事例や課題について触れ、今後求められる授業改善の方向性について考察する。まず、言語活動をゴールに据えた単元づくりのための単元構成や指導・評価計画について述べる。次に、「話すこと」や「書くこと」領域の言語活動における「思考力・判断力・表現力」の捉え方について述べ、そして、ICT 活用から見えてきた指導改善と英語教師の役割に触れる。

最後に、中・高等学校の指導経験を経て、大学で学生に英語を指導する立場から、大学で何ができるかと思っていたか、できているか、できていないか、思い描いていたことと現状、そして課題についても振り返ったことを共有したい。



津久井貴之（つくい たかゆき）

群馬大学共同教育学部英語教育講座講師

群馬県内国公立中学校、中高一貫校教諭、県教育委員会指導主事、都内国立大附属高等学校、私立中高一貫校教諭等を経て2022 年4 月より現職。

中学校学習指導要領執筆、令和元年度全国学力・学習状況調査作問・分析等に関わる。小・中・高等学校検定教科書著者。中・高等学校の指導法、特に教師の英語使用について研究している。

Lecture 2

「学生 1 人 1 人の個性的な英語力の可視化を目指して」

卯城祐司氏（筑波大学）

講演②【要旨】

学習指導要領の改訂に伴い中高の英語教育がどのように変わり、また今後変わっていくのか、英語力の経年変化についての先行研究を概観する。そして、試行調査（プレテスト）を経て導入された大学入学共通テストの狙い、そして、令和 7 年度の試作問題をもとに、「実際のコミュニケーションを想定した目的や場面、状況の設定」について、また、「英語の知識を、実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況に応じて適切に活用できる技能」について考える。

その上で、現在、中高生が取り組んでいる「目的や場面、状況に応じた理解・表現」の難しさや、「自分のことばで語るべき」リテリング（再話）が暗唱に終わることも多いこと、唯一出来ると思われているリーディングが「読めたつもり」に終わっていること、このリーディングを変えることが 4 技能 5 領域全体の改善にもつながることについて、ふれたい。

最後に、自身の英語授業も省みながら、全ての大学で、また、各大学所属の全学生が同じ英語力を目指すべきかを考えたい。たとえ英語がそれほど得意でなくとも、英語が好きな学生はいる。その 1 人 1 人の英語の個性をどう伸ばすのか、英語と共に育つ学生の姿を思い浮かべる必要がある。また、学生たちの個性的な英語力を、どう可視化するか、私たち教員の力量も問われている。さらに、卒業後も、生活の一部に英語が入っているような大きなビジョンを示すべく、私たち教員自身も常に英語と共にありたい。



卯城祐司（うしろ ゆうじ）

筑波大学人文社会系 教授

博士（言語学）。道立高校 3 校、北海道教育大学釧路校を経て現在、筑波大学教授。全国英語教育学会会長、小学校英語教育学会会長等を歴任。

趣味はマラソン（調子が良い時はサブ 4）、にゃんスタグラム（mogimogi_yomogi）に大型バイク（カワサキ Z900RS）。

Poster Session #1

【氏名・所属】

澁井とし子（東京福祉大学）

【発表タイトル】

新学習指導要領に沿った小学校外国語を指導できる教員養成の充実

【要旨】

小学校教員養成課程の「外国語」をより充実させるために次の5つを大学で意識して行うと良い。①新学習指導要領に合わせて小学校外国語の目指す姿を正しく学生に伝える。「言語活動」とは何か、そしてそれは従来のパターンプラクティスのような作業ではいけない。更にコミュニケーションは、その場面、状況、相手に応じて変化するため、柔軟に対応できる英語運用力を養う。②学生の今まで経験してきた英語教育は、訳読中心や黒板の文字を書いて教え込むスタイルが多いため、学生の認識を変えて今の小学校のやり方に適合させる。③教員志望でも英語が苦手で困難を感じている学生の苦手意識の軽減、英語を楽しいと感じ自信を持って英語を指導できるよう学生のビリーフを変える。④自ら英語を学びたいと学生が感じることができるよう大学の授業自体を工夫する。⑤学生の英語学習習慣の形成を促せるよう教員が支援する。これら5点を行うことにより、英語への不安を取り除き、適切な小学校外国語の指導ができる教員養成が可能となる。しかし実際には①と②に大きなギャップがあるため、その埋め方が大学での課題の1つである。そして大学の授業でメタ認知方略と社会・感情方略の使用により③の支援をし、④と⑤の充実が重要である。今年度は①～④は実践でき効果的な成果がみられたが、⑤の学生自ら英語を学ぶ点が課題として残ったため、今後はこの点を強化すべき教員の支援方法を提案する。

Poster Session #2

【氏名・所属】

服部しのぶ（鈴鹿医療科学大学）

【発表タイトル】

医療系大学における English for Medical Purposes (EMP) 教育
－学部学科統一プログラムの実践－

【要旨】

本発表は、将来の医療・福祉職を養成する医療系私立大学における1年生の英語教育についての実践報告である。

全学部学科統一プログラムで、高校までの General English から専門的な医療英語(EMP)への橋渡しとなる入門レベルの教材を使用している。教員間で授業資料を共有し、学生へ配布するプリント類や定期試験もすべて同一のものを使用し、評価基準も統一している。クラス編成は、学部学科ごとで、授業は基本的にその学部所属の英語教員が担当している。

このようなプログラムのメリットとしては、授業以外の場で、学部学科を超えて異なる専門分野を学ぶ学生同士で教え合い学び合うことができる点が挙げられる。また、テキストで扱っている語彙や英語表現を学び読解力向上の練習をすることで、学生の英語力を一定程度確立できる。

一方、デメリットとして、学生間の英語力の差が顕著となり、それを補うことが授業時間内では困難で、後の専門的な EMP 学習へ繋がりにくいことである。高校までの英語学習で既に苦手意識を持ち大学入学試験で英語を選択せずに入学する学生も多い。そのような学生にとっては、リメディアル教育などの個別対応無しでは、英語学習へのモチベーション低下が懸念される。

教員はジレンマに陥りながら教授法や授業形態を工夫し日々実践しているが、今後のプログラムの改善を目指し、より良い方策を探りたい。

Poster Session #3

【氏名・所属】

山本享史（天理大学）

【発表タイトル】

到達目標表作成を軸にした天理学園の英語教育異校種間連携の取り組み

【要旨】

学校法人天理大学に所属する小学校、中学校、高校、および大学が、英語教育の連携活動を2013年に始めてから10年が経過した。本発表ではこの取り組みの発足経緯からこの10年間の取り組みの過程、現状、今後の展開の見通しについて発表する。学校英語教育の異校種間連携の重要性が認識され、公立、私立を問わず多くの連携推進事業が取り組まれているが、連携目的の明確化や継続的な推進をその課題として挙げる事業報告も散見される。本学園の英語教育連携活動の特徴は小中高の英語教育を見通した、連続性のある英語到達教育目標の作成にこだわり、目標表を毎年見直し、改訂することを軸にしてきたことである。天理学園英語教育ガイドライン作成プロジェクト（Tenri Schools English Education Guidelines :T-SEEGs Project）としてスタートしてから、改訂のための意見交換と表作成作業を中心に定期的な集まりを開催している。この会議体が行ってきた活動には、学校間の情報交換（児童・生徒の学習やALT、ICTの活用状況など）、共通課題への共働的取り組み（設置法人への制度や人的配置の要望など）、教員研修会、児童・生徒の交流企画の立案、運営が挙げられる。連携を10年継続する中で各校の英語科教員の入れ替わりもあり、この取り組み自体が各学校の英語科教員のTeacher Developmentの一環としても位置づいている。本学園の異校種間連携は継続性をもって実施できているとは言えるものの、学園独自の教材開発や到達目標表の達成検証方法の充実など進展の遅い部分や課題も抱えている。

Poster Session #4

【氏名・所属】

酒井裕（リバプール大学 大学院生）

【発表タイトル】

日本人英語教員の自作スライド教材の振り返り研究

【要旨】

本発表では、修士論文「スライド教材の振り返り研究」について発表する。本研究では、近年の英語の授業において主流になっているスライド教材を対象とした2回の振り返りオンラインインタビューを、日本人の中高英語教員5名に実施した。振り返りのため、本研究が考案した自作教材評価の枠組み（Artefacts Assessment Scheme）で分析を行い、その結果を初回インタビューで提示。振り返りの活性化に使用した。参加者は初回インタビューを基に必要なスライドの改訂を行い、第2回インタビューでその方法と理由の聞き取りを行った。研究課題として次の4点を設定した。① スライド教材には被験者のどのような信念や原則が反映されていたか。② スライド教材にはどのような種類の質問が多く使用されていたか。③ スライド教材には、教材開発の原則がどのように反映されていたか。④ 被験者はどのように教材の改訂を行ったか。

データ分析の結果、以下の結果が得られた。① 教材には被験者自身の経験や教科書本文への批判的態度などが反映されていた。② 教材の質問の種類に明確な傾向は見られなかったが、いくつかの効果的な質問配列が見られた。③ 教材に反映されていた原則（自分事化・自己関連性、認知的負荷、新奇性・驚き、背景知識の活性化）の実例を発見した。④ 被験者による改訂前と改訂後の教材の比較により、いくつかの実用的示唆が得られた。本発表は、特に④を中心にまとめ、今後の研究の方向性についても論じたい。

Poster Session #5

【氏名・所属】

Stacy Clause (Takasaki University of Health and Welfare)

【発表タイトル】

Authenticity and realia: Building collections for pre-service teachers

【要旨】

Realia have been part of many foreign language classrooms abroad for decades, but authentic materials are rare in the Japanese classroom. Marshalling these materials takes a special effort on the part of teachers, and require a level of expertise and experience to be use effectively as a learning tool. As one prong of the new English language teaching guidelines is to use “authentic” English (MEXT, 2020), a useful component of authenticity is realia. Students can interact with “real” materials such as maps, puppets, media and other objects to strengthen their associations with words and concepts. In particular, imagery of the cultural worlds provided by newspapers, music and other objects allows students to picture themselves living in a world where English is used (rather than only studied). Realia is a direct link with the target culture, and provides proof that English exists outside the classroom (Berwarld, 1987). Although Ministry approved textbooks provide some video materials about other cultures, only basic learning materials such as flashcards are provided for classroom use. This poster highlights some projects using realia in the Japanese elementary school English classroom, as well as efforts to help preservice student teachers identify and use materials in preparing their lessons.

Poster Session #6

【氏名・所属】

藤井彰子（国際基督教大学）

【発表タイトル】

Is there a role for researchers in implementing pedagogic tasks in secondary schools?

【要旨】

Pedagogic tasks provide learners with the opportunity to “use language, with an emphasis on meaning, to achieve an objective” (Bygate, Skehan, & Swain, 2001). Many aspects of tasks align with the goals of the New Course of Study Guidelines, in that tasks are meaning-focused, provide learners with opportunities for authentic output, and also encourage learner autonomy. However, it can be challenging for teachers to design or adapt tasks to fit their context, and effective implementation can also be difficult (East, 2018; Erlam, 2016), especially in Asian contexts (Butler, 2011). Previous studies have reported on training programs for in-service teachers (Erlam, 2016; 2022) as well as collaborative efforts by practitioners (McDonough & Chaikitmongkol, 2011). More work is needed to explore the potential of collaboration between practitioners and university researchers, especially in the Japanese context. The goal of the current study is to investigate secondary school English teachers’ perceptions about incorporating tasks into their teaching. Guiding questions include the following: Do teachers think tasks can enhance their lessons? If so, what are the biggest challenges they face? Would they benefit from some kind of collaboration with university researchers? If so, what kind of collaboration would be useful? This exploratory study reports on interviews with a range of novice and experienced teachers in junior and senior high schools. Insights gained from the interviews can inform future collaborative efforts between practitioners and researchers to integrate pedagogic tasks into secondary school classrooms.

Poster Session #7

【氏名・所属】

久井田直之（日本大学）

【発表タイトル】

英語既習語彙指数を用いた英語教育と経済学教育の融合
－CORE-Econ ガイドブックを例に－

【要旨】

学習指導要領の改訂に伴い、高校英語教科書は改訂を繰り返している。英語語彙に関して現学習指導要領では、小学校(600語－700語)、中学校(1600語－1800語)、高校(1800語－2500語)、高校卒業時の合計が4000語から5000語を目標として掲げ、旧学習指導要領の高校卒業時の3000語と比べて、急激に増えている。しかし、多くの語彙を習得することが重要視されながらも、高校の英語教科書語彙の有用性を示す研究は残念ながら多くない。発表者の過去の研究で高校教科書語彙を分析し、独自の英語語彙指数（既習語彙指数, already learned vocabulary INDEX, ALV）を開発し、英語教員以外のこの語彙指数を用いた語彙指導や語彙学習への応用の可能性を示した。本研究はその語彙指数を用いた、オンライン経済学英語教材への応用例を示した研究で、英語経済学教材 CORE-Econ のガイドブックを作成し、英語で経済学を学ぶこと、英語で経済学を教えることをサポートすることを目的として行われた。経済学の教員にとっては、英語で経済学を教える際に、受講生がどのような英語力を持っているかについての情報を事前に把握したうえで授業を行うことは難しい。本ガイドブック内に、英語語彙情報（頻度表や語彙指数に基づく注目語彙を紹介する表）を示すことで、教える側も学ぶ側も英語語彙への配慮を十分に行い、経済学を学ぶことを可能にすると考えられる。語彙表の作成プロセスや語彙表などを紹介し、経済学教育と英語教育の融合のモデルを本研究で示したい。



JACET the 11th English Education Seminar Sponsor Members' Exhibitions

JACET 第 11 回英語教育セミナー 賛助会員出展

2024 年 3 月 23 日 (土)

展示場所：文教大学越谷キャンパス 14 号館 14101

展示時間：10:00 - 16:00

会員発表：11:45 - 12:15

展示説明：13:30 - 14:00

(英数→カナ→漢字：あいうえお順)

ETS Japan

クリエイド・ラーニング株式会社

ケンブリッジ大学出版株式会社

ピアソン・ジャパン株式会社

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

株式会社 EdulinX

株式会社 mpi 松香フォニックス

株式会社 エル・インターフェース

株式会社 朝日出版社

公益財団法人 日本英語検定協会

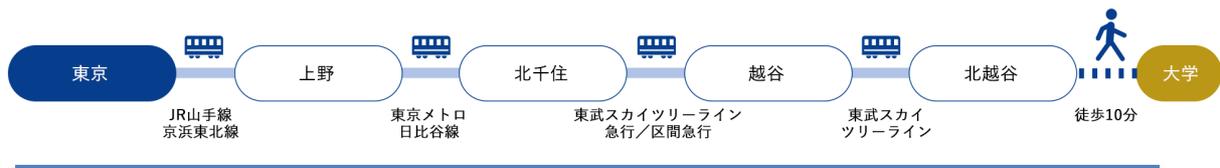
Access to the Venue

文教大学越谷キャンパス

埼玉県越谷市南荻島 3337

Directions to the Campus :

東京駅から：電車 約 50 分



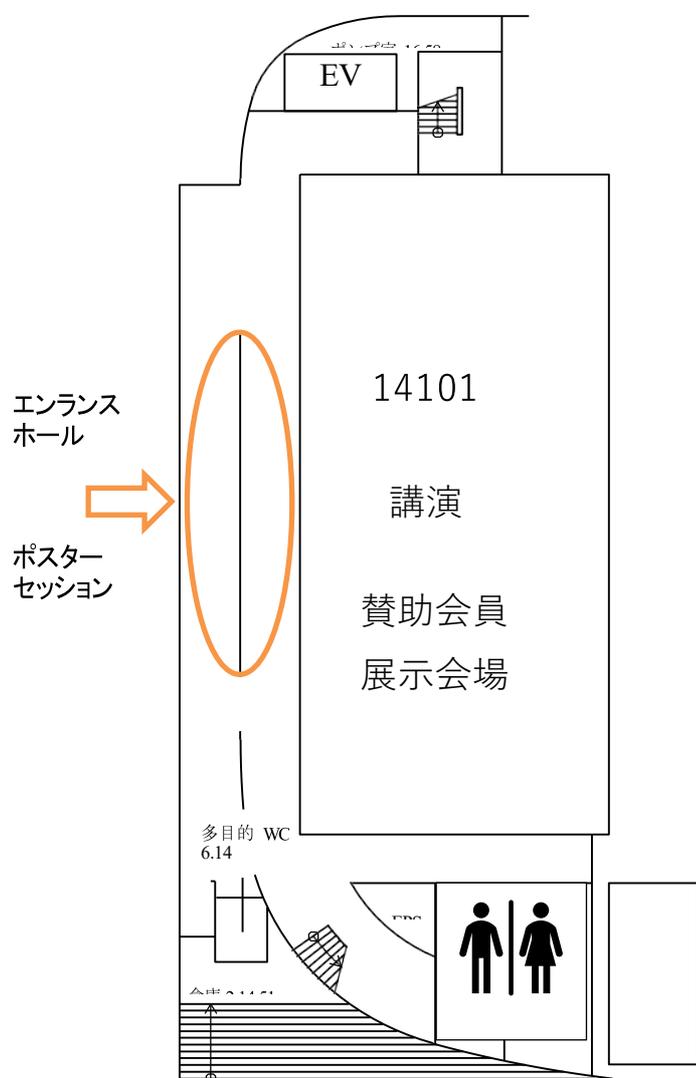
北越谷駅（東武スカイツリーライン、東京メトロ日比谷線・半蔵門線、東急田園都市線（直通乗り入れ））西口下車徒歩約 10 分

※北越谷駅には準急、区間準急、普通が停車します。（快速・区間快速、急行・区間急行は停まりません）

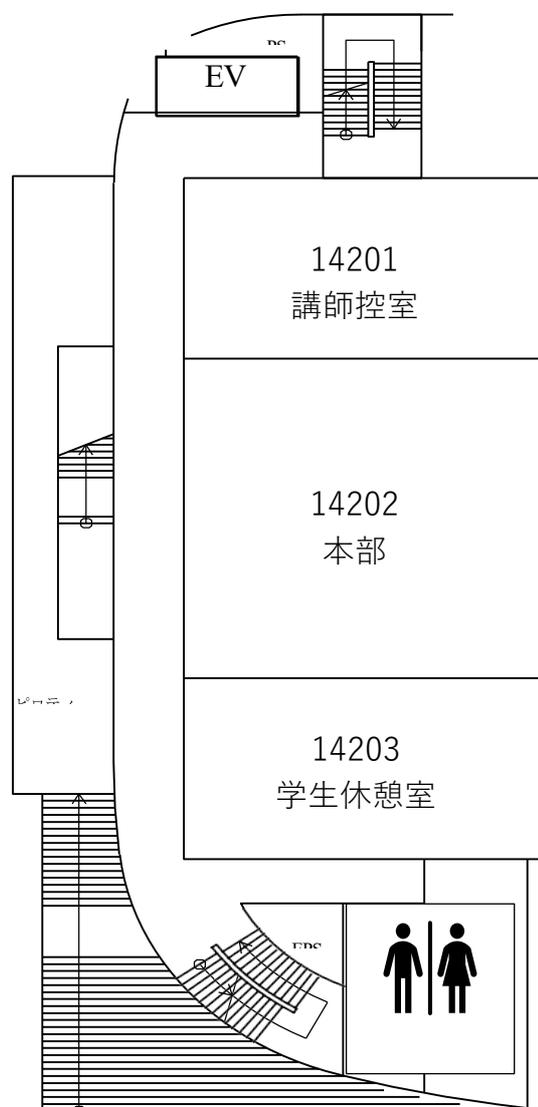


14号館

1階



2階



■食事

学内の食堂 1F (3号館に隣接) 10:00 - 13:30
 コンビニ ファミリーマート (6号館1階) 08:30 - 13:00

■自動販売機

14号館3階エレベータ横にあります。

■eduroam

文教大学内で使用可能です。
 アクセスにご勤務校と同様のIDとパスワードが必要となります。

Notes

A series of horizontal dashed lines spanning the width of the page, intended for writing notes.

